

富士紀行(80) かかる教官ありき (教官讃歌) 第3弾 (H13/7/12 記)

梅雨が明けたのではないかと誰しもが思っていたところ、やはりと言うべきか梅雨明け宣言が成された。いよいよ本格的な夏である。

さて、「かかる教官ありき (教官讃歌)」として、機甲科部の訓練教官、特科部の武器教官を採り上げたが、掉尾として、富士学校の花形教官職の一つである戦術教官を紹介しよう。彼、K3佐は、富士学校普通科部教育課第一戦術班の戦術教官を拝命して一年半、教官として脂の乗りきった正に旬の教官でもある。普通科部の某から提供を受けた資料を主体に紹介する。小生も2～3回彼の教官ぶりを視察したが、緊張はしていたものの、以下に述べるエピソードの正にその通りであろうとの感を持った次第である。

K3佐は、過去には訓練教官として普通科部に勤務し、平成12年3月第1期幹部特修課程(近接戦闘)を優秀な成績で卒業後、再度後輩育成の使命に燃え、自ら熱烈に希望して第1戦術班教官となった。

教官拝命以来、2期連続して幹部上級課程指導官として、真に役立つ中堅幹部の育成に邁進している。防衛大学時代は、相撲部主将として活躍し、学生教育にもおいても持ち前の押し出しの強さと四十八手を駆使して、学生の絶大の信頼を得ている。

① 「どこまでが演技か本気か」不思議な魅力の役者教官

AOC第1次兵棋演習の事前教育における一コマ。演習状況の開始に先立ち、学生に対する会議実施要領に関する事前教育時、K3佐は第3科長役を命ぜられ、悪い会議の一例と良い会議の一例を他教官とともに展示することとなった。

当然、展示前にシナリオに基づき予行してはいるが、他教官も本番で何が飛び出すのか興味津々。学生には一切の説明無しに、いきなり悪い会議の一例の展示開始、K3科長は準備の不手際について運幹をどなりつけるわ、状況説明も適当にごまかすわ、遂には携帯電話が鳴り出すわと、ありとあらゆるドタバタ劇を演じ、学生を大いに沸かせた。その様子は、彼をよく知る同僚も呆れるほど、演技を越えた演技だった。教官の間ではあれは「演技ではなく地のまま？」と囁かれたが、その後の良い会議の一例展示において、幕僚道に徹した3科長を展示し、実は「これが彼の真の姿だ」と教官・学生を感嘆させたのであった。

印象深い事前教育のお陰か、過去の期に比し格段に成果のあった兵棋演習となったことは言うまでもない。

② 飄々としてまた堂々とした「横綱」教官

元防大相撲部主将K3佐は、学生教育の場においても常に横綱相撲。ある想定教育

の場面、学生の討議において焦点が少しずつ、ずれ始めたとき、K教官一言「おいおい、おまえら何の話をしてんだ？よくわかんねえなあ」、「おい〇〇2尉、どうだ、話見えるか？」と討議に参加できない（しない？）学生に問いかける。「そうだよな、わかんないよなあ」学生の自由な討議に任せつつ、放任のポーズを取りながら、実はその焦点を確認し、また討議に積極的に参加しない学生にも気を配り、全員を教育の中心に取り込んでいこうとする指導法である。

学生の質問に対しては、「俺はよお、戦術不得意だから。わかんねえよ、でも教範にはなんて書いてんだ？教えてくれや」と、単にストレートに原案を示すのではなく、学生の研究心を刺激して自ら学び取る雰囲気醸成する。横綱級？の外見（体格）とは裏腹に徹底した教育準備と自学研鑽に裏付けられた細やかな教育指導法に、真の横綱教官の風格が窺える。

- ③ 常に教育現場に笑いを提供し、学生を知らず知らずのうちに教育の中に導く手法は、訓練教官時代から一貫して変わらず、戦術教官としても「Kワールド」ともいえる一つの世界を作り上げている。卒業生からは、その人柄について強烈な印象で語られ、多くの学生の記憶に残っている。

④ 学生からの一言

a 「考えさせる教育」を実践されている教官でした。学生を甘やかさず、学生自身に答えを見つけださせようと、常に創意工夫されていました。教育間は、大いに悩ませて頂きましたが、その分「K班」は他班より身についたものがかなり多かったと確信しています。BOC・AOCを通じて同じ教官に教育していただけること自体、大変ありがたいことですが、その教官がK3佐であったことに心から感謝しています。

b BOC・AOC両課程ともK3佐の教育を受けましたのでよくわかりますが、一言で言いますと「放牧式自己解決強要型」の教育でした。悪く言えば「放任」ということになるのでしょうか？しかし、それだけ学生のことを信用してくれたのだと思います。

学生との信頼関係を最も大事にされている教官でした。その分学生からの信頼も一番厚かったと記憶しています。

彼は、普通科部の某が推薦する北村厚3等陸佐である。自治会の委員をも務める彼は、地域にあっても同じく素晴らしい男である。この3名に共通するのは何か？思うに、幹部そして教官は、須く人生の教師たるべきであり、教官に必要なものは『愛と熱』であることに疑いを入れない。又、ネアカ、明朗闊達であって皮肉屋ではないことが必須の条件かも知れない。北村3佐も機甲科部の森田2佐も特科部の宮本3佐も学生に対する

強い愛情と教育に対する強烈な情熱を持っていることでは共通である。そして、また、彼らと同じく愛と情熱を持って教育に取り組んでいる多くの教官が居ることを確信していることを記して、「かかる教官ありき（教官讃歌）」を終わりたい。何れ、機会あらば教育・訓練を支える多数の諸官等に焦点を当ててみたい。